國學院大學学術情報リポジトリ

近代日本国定修身教科書における「忠君愛国」教育の変遷：楠木正成· 正行を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 修身, 国定教科書, 忠君愛国, 楠木正成・正行 キーワード (En): Self-cultivation , National textbooks, Loyalty and Patriotism , Kusunoki Masahige and Masatsura 作成者: 郭, 偉京 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001641

近代日本国定修身教科書における「忠君愛国」教育の変遷
―楠木正成･正行を例として―

A Transformation of 'Loyalty and Patriotism' education in Modern Japan's etiquette National textbook:
Taking Kusunoki Masahige and Masatsura as an example

郭　偉　京

キーワード：修身　国定教科書　忠君愛国　楠木正成・正行
Key Words: Self-cultivation　National textbooks　Loyalty and Patriotism　Kusunoki Masahige and Masatsura

要旨

1890年、日本政府は天皇の名で「教育ニ関スル勅語」を公布し、それによって徳育教育の方針を定めた。1891年、『勅語衍義』が公布され、当時の教育勅語解説書を代表するものとして広く教科書に用いられた。『勅語衍義』は『教育勅語』の趣意を「孝悌忠信」と「共同愛国」と述べている。その後、軍国主義思想の強化につれて政治上の君主である天皇は道徳上の君主であり、また精神上の唯一の柱となる。それ以降、日本近代教育は国家主導の下で『教育勅語』を中核として青少年に「忠君愛国」という思想を植えつけた。

近代日本国定修身教科書は国民道徳思想を統制する道具として、その内容は「忠君愛国」教育の特徴と意味を体現している。本文は近代日本国定修身教科書における「忠君愛国」の代表人物である楠木正成・正行父子を例として、その人物教材に基づいて各期国定教科書におけるテキストの変遷と人物形象の移り変わりを整理し、道徳の重点の変化を闡明した。それによって、近代日本の「忠君愛国」への解釈と変遷を究明し、また「忠君愛国」教育の目的と特徴について考察してみたいと思う。

Abstract

In 1890, Japan promulgated the Imperial Rescript on Education in the name of the Meiji Emperor, which determined the policy of moral education in Japan. In 1891, the Chokugo Engi was promulgated and widely used in textbooks. This book explained that the main purpose of the Imperial Rescript on Education was "Confucian moral injunctions of fidelity" and "Common patriotism", and this purpose was actually given the key point of obedience to the Emperor and the country. Then, with the strengthening of militarism, the Emperor, the Political Monarch, was also the Moral Monarch and the only Spiritual Pillar. Since then, under the leadership of the state, modern Japanese education has instilled the idea of "Loyalty and

patriotism” into young people with the Imperial Rescript on Education as the core.

As a tool for controlling the moral thoughts of the nation, the content of Modern Japan’s etiquette National textbook reflects the characteristics and connotations of “Loyalty and Patriotism” education. This paper takes the representative figures of “Loyalty and Patriotism” in Modern Japan’s etiquette National textbook, such as Kusonoki Masahige and Masatsura, as examples, sorts out the changes in moral emphasis based on the text changes and image changes of the characters in the national textbooks of each period. Thus, to clarify the interpretation and changes of “Loyalty and Patriotism” in modern Japan, and examines the purpose and characteristics of “Loyalty and Patriotism” education.

はじめに

1903年４月に小学校令の改正により、近代日本で教科書の国定制度が確立され、文部省が修身を始めとして教科書の編集を行なった。学界では、近代日本の教育政策の制定と改正につれて、国定教科書の出版と四回の大きな改正を基準にし、第二次世界大戦敗戦までの国定教科書を五つの時代に分けている。具体的には国定第一期教科書（1904-1909年）、国定第二期教科書（1910-1917年）、国定第三期教科書（1918-1932年）、国定第四期教科書（1934-1940年）、国定第五期教科書（1941-1945年）であるとみなされている。

加えて、1903年から1945年まで実施された国定教科書制度は、国民思想の統一を目指し、教科書に対する国家統制を強化し、教育行政の集権化を表現している。国定教科書が教育方針と緊密に繋がり、その改訂が近代日本の「忠君愛国」教育の変遷とナショナリズム思想の形成過程を反映している。近代日本国定修身教科書における「忠君愛国」の代表人物は幾多にも及ぶが、本文は五期にわたって「忠君愛国」の「千古模範」と評価された楠木正成・正行父子を選び、その教材から「忠君愛国」に内包された意味を探していきたいと思う。

一、楠木正成･正行に関する先行研究

（一）楠木正成･正行の生涯

楠木正成は、鎌倉幕府末期から南北朝時代にかけて活躍した有名な武将である。1331年、後醍醐天皇が鎌倉幕府の討伐を謀り、地元の有力者に討幕を呼びかけ、元弘の乱が勃発した。楠木正成は巧妙な戦術で少ない兵力で幕府の主力を

封じ込め、千早城で鎌倉幕府軍と激戦を繰り広げ、幕府の攻撃を食い止めることに成功した。1333年、足利尊氏と新田義貞の援助により、鎌倉幕府が滅亡した。後醍醐天皇が建武新政を実施すると、楠木正成は河内、和泉の守護となる。正成は建武の新政において後醍醐天皇の絶大な信任を受け、結城親光、名和長年、千種忠顕とあわせて「三木一草」と併称された。

1335年、足利尊氏が後醍醐天皇に反乱を起こしたとき、正成は後醍醐天皇に忠誠を尽くした。1336年、足利尊氏は九州で勢力を盛り返し、再び大軍を率いて京都に押し寄せた。楠木正成は敵を弱めるために遷都を提案したが、後醍醐天皇に断られた。後醍醐天皇は正成に、新田義貞の指揮に従い足利軍を迎え撃つよう命じられた。正成は命がけで湊川の戦いに臨み、足利氏と戦った。楠木正成についての史料が少ないため、文学創作には一定の余地が残されている。正成は死を覚悟し、湊川の戦場に赴いた途中に11歳の子正行を呼び寄せて別れを告げ、敗戦した後で弟の楠木正季と刺し違えて最期を遂げたことが伝える。

楠木正成·正行は南北朝時代、戦国時代の文学作品で庶民に知られた。実は、楠木正成の前半生はよく判っていないが、室町時代に河内・和泉を本拠とする「悪党」であったと言われた。しかし、最後まで主君を裏切らなかった物語は、時代を経ても語り継がれ、時流に応じて様々な解釈がされてきた。江戸時代の初期で、『太平記評判秘伝理尽鈔』は正成を理想的な武将・為政者のごとく扱って作品の中心人物と位置付けている。『古今軍理問答』には「古今無双の大将」や「名人」といった正成への賛辞を見ることができる。それらは「智仁勇」の三徳兼備（『太平記』巻十六「正成兄弟討死事」）を踏まえて評価されている。

江戸時代から、徳川光圀が編纂した『大日本史』、頼山陽の『日本外史』などの歴史書は、南朝の正統な立場から楠木正成を忠臣の模範になされた。1893年に出版された近代日本の初めての国語辞書である『日本大辞書』には、「楠木正成　河内ノ人。左大臣橘諸兄ノ裔。誠忠勤王、北條氏ヲ平ゲテ宸襟ヲ安ンジ、逆賊尊氏ヲ除カウトシテ湊川ノ露ト消エタ。」とあり、同様に正行の紹介では、「楠木正行　父ノ遺訓ニ従ツテ賊ヲ討チ、終天ノ恨ミヲ呑ンデ四條畷ニ歿シタ、時ニ正平四年。」[1] と書かれている。明治時代に入ると、南北朝正閏論を経て「南朝が正統である」とされると「大楠公」と呼ばれるようになった。

---

(1)　山田美妙編.『日本大辞書 附録』. 日本大辞書発行所, 1893年, p9。

（二）検定教科書時代の「忠臣」像

教科書検定制度は1886年に制定され、検定教科書が一般的に採用されるようになったが、「修身」に関しては最初に文部省が教科書を使わない方針をとり、検定も行わなかった。道徳教育への重視と教える過程での需求に応じるために、1891年に日本政府が教科書を使用することとし、1893年には検定を受けた修身教科書が現われた。1901年から1902年までに多く出版された人物主義の教科書はヘルバルト学派の教育思想に立脚し、歴史上の人物の伝記や寓話により児童の興味を喚起し、自然に感動させるべきであると主張した。

例えば、1902年に出版された『新編修身教典』の第二十二課に「楠木正成卿は、河内の人にて、いとけなき時より、武勇のきこえありたり。（中略）わづかの軍勢にて、賊の大軍をうちやぶられたれば、心ある武士らは、みな、卿の忠義に感じて、ふるひ立ち、つひに、北條氏をほろぼしたり。（中略）天皇は大いに、卿の忠義をほめさせたまひしかば、卿は、うれし涙に袖をぬらされたり。」(2) と書かれている。内容の記述から見ると、「武勇」と「忠義」の品格を取り上げて物語を描かれている。

『新編修身教典』の第二十三課にも「楠木正成」を主人公にして「卿は、『この度のいくさには、生きてかへらじ。』とかくごせられ、その子正行卿を櫻井驛によびよせて、（中略）『汝、成長ののちは、かならず、父の志をつぎて、大君のみ心を安んじ奉れ。』」(3) と記し、正成の遺言によって天皇への忠義を強調した。戦争の過程で、楠木正成は敵軍に対して奮戦し、十六回の攻撃にもかかわらず、二十万人の敵軍に対抗することができなかったので失敗した。結局、正成は民家に入って、弟正季と刺し違えた。文章の最後で、明治天皇は楠木正成の忠義精神を深く讃えて湊川に神社を建立して祭祀を行ったと記されている。

教科書は政府が国民を教育するための媒介であり、その本質は国家が国民への教育の方向というものを反映している。日本の近代教科書では、楠木正成は忠臣として称賛され、その兄弟や妻、子どもも登場したことも相まって、家族の全体像が忠臣孝子を中心として宣伝されることで、天皇への忠誠を強調した。中村格の研究によれば、楠木正成は「太平記では智謀無双の悪党的武将として活躍さ

---

(2)　普及舍編輯所編.『新編修身教典　尋常小學校用　卷4』. 普及舍, 1902年, p38-p46。
(3)　同上, p63-64。

せ、七生滅敵を誓う呪いと怨念にみちた凄絶な最期を遂げ、怨霊となって世を乱し続ける」[4]と表現している。同時に、『太平記』で正成とその弟正季が自殺する際、恨みを抱いている描写も見られる。しかし、教科書では正季が勇敢に死を受け入れる姿や、正成の忠義を表現するために、その事跡を美化して掲載している。

以上から見ると、検定教科書は、歴史の叙述に比べて教育効果を重視し、強い教化の作用を持っている。江戸時代の忠義の品格を中心とした楠木正成の忠臣像を引き継ぐとともに、軍事で優れた戦略や戦術を示し、軍人像もある程度に保たれていた。『太平記』の叙述を比較することで、検定教科書時代における楠木正成像が歴史人物の形象より文学作品の形象に類似していることがわかった。国定教科書時代に入ってから、文章の内容も変化しつつあり、楠木正成を除いて楠木正行や楠木正行の母などの人物が登場し、楠木正成の物語が最初に忠義の精神を宣伝することから、忠君と忠孝の道徳へと徐々に変化していったことがわかる。

（三）教育勅語と国定教科書の登場

明治10年代から20年代にかけて、日本の近代教育体制が初歩的に確立された後、仁義忠孝を中心とした儒教道徳が復活し始めた。激しい自由民権運動に抵抗するため、中央教育行政の統制と天皇の権威が徐々に強化されている。これにより、当時の日本政府は中央集権強化の教育政策を実施した。1890年に発布された「教育ニ関スル勅語」は「忠君愛国」を基本とする日本近代道徳教育の核心を確立した。1891年に『勅語衍義』が公布され、その「自序」において、「孝悌忠信及ビ共同愛国ノ主義ハ、一日モ国家ニ缺クベカラザルコトニテ」[5]と写し、『教育勅語』の趣意を「孝悌忠信」と「共同愛国」と述べ、実際に天皇と国家への服従という意味が内包された。

『教育勅語』の影響で、近代日本の学校教育の精神的な核心はすでに初歩的に確立されており、つまり日本国民の天皇への忠誠心を育成し、学生の国民意識を高めることに意義があった。そして、『勅語衍義』に「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ（中略）殊ニ楠正成及ビ正行ガ皇室ノ爲メニ一命ヲ抛チテ臣民の節義ヲ全クセシが如キ」[6]と書き、楠木正成及び正行の事蹟を利用して「天皇への忠誠」、「武士道

(4) 中村格.「天皇制教育と太平記：正成・正行像の軌跡」. 日本文学, 45（3）, 1996年, p13-23。
(5) 井上哲次郎.『勅語衍義　巻上』. 文盛堂, 1899年, p5。
(6) 同上, p3-4。

の精神」への注釈として書かれた。近代日本の国定教科書が多くの歴史上の人物を採用するにもかかわらず、楠木正成及び正行の事蹟が五期の国定教科書にわたって出現する原因はその一つであると考えられる。

教育勅語の渙発と中日甲午戦争を経て、日本政府が検定教科書から国定教科書へと変化し、教育方針も統制的なものへと展開していった。皇国史観の下で、楠木正成の戦死覚悟を持って戦地に赴く姿、天皇に忠誠を誓った物語が「忠臣の鑑」、「日本人の鑑」と讃えられ、日本近代の修身国定教科書で広く用いられている。これに基づいて、楠木正成の忠義は「忠君愛国」の脚注として近代日本の戦意高揚にも利用され、楠木正成が最期に誓った言葉「七生滅賊」は、何度生まれ変わっても日本のために戦うという意味の「七生報国」と言い換えられた。日本は太平洋での作戦を楠木正成の家紋にちなんで「菊水作戦」と名付け、多くの特攻隊員が七生報国をスローガンとして死んでいた。

二、近代日本国定修身教科書における楠木正成･正行

（一）第一期と第二期：「忠義」から「忠孝」へ（1904年-1917年）

1895年に中日甲午戦争（日本では日清戦争と呼んでいる）で日本が勝利して国内のナショナリズムを刺激した。これを受けて、修身教科書に不満が生じ、国による教科書の編纂が求められている。国定教科書を採用すると、人物の伝記を通じて徳目を教える方法が小学修身という学科に定められた。第一期国定修身教科書が1904年に文部省から発行され、「忠君愛国」という教育について「忠君」と「愛国」に分けて記述している。小学校の修身教科書の第三学年の「忠義」という題目には日本陸軍の軍人谷村計介という人物が採用され、第四学年の「愛国」一課で河野通有の物語が掲載され、「忠君」の二つの課文では楠木正成と楠木正行を中心に内容を展開している。

第一期国定修身教科書の第四課の内容において、正成は、天皇の命を受けて、「わづかのへいをもって、たびたび、高時の大軍をうちやぶりました。」(7) と記されており、その意味で天皇への忠心と天皇のために戦うことへの賛辞が見える。また、第五課で、正成は子の正行に「父がなくなった後も、ちゅーぎのこころを

(7) 文部省.『尋常小學修身書　第４學年　児童用』. 印刷局, 1903年, p5。

うしなふな。こーこーの道は、これよりほかにはないぞ。」[8] と教え、湊川で大勢の敵と戦って討死した。正行は父の討死を知って悲しみのあまりに切腹を決意した。その時に、正行の母は「お父さんが教えてくれたことを忘れたの」と尋ねた。それ以来、正行は両親の教えを受けて立派な忠臣となった。

その第四課の内容には、『新編修身教典』の『楠木正成卿（一）』と比べて楠木正成の英勇、少数で多数に打ち勝ったという描写が消え、テキストの文字数も大幅に削減した。その見出しが「忠君」に変わり、文章の核が「忠」をめぐってより少なく且つ平易な言葉によって展開している。第五課と『新編修身教典』の『楠木正成卿（二）』を比較し、第五課で楠木正行が父の志を受け継ぎ、忠臣になる物語に重心を移し、それに楠木正成の妻で楠木正行の母というキャラクターを加えた。その内容で、楠木正成は戦争の前に、「孝行の道は忠義より他にはない」という話を子である正行に言った。

以上を踏まえて、1911年に第二期国定尋常小学修身書に対する全部の改定を終了した。『尋常小學修身書　兒童用　巻6』の第七課が「忠孝」を題目として楠木正行の物語を描いた。第一期の内容を比べて「櫻井の別れ」を詳細に描写した。文章の第一段落で楠木正成が天皇の勅を奉じて敵を討っている背景を紹介した。それと同時に、「正成この度の戰には生きてかへり難しと思ひ、途中櫻井の驛にて其の子正成に向ひ、『我死すとも汝は我が志をつぎて必ず君に忠義を盡し奉れ。これ汝が我に盡す第一の孝行なり』と懇に諭して河内に返し遣はしたり。此の時正行は十一歳なりき。」[9] と描かれている。

その後、正行が父の戦死を聞いて深くこれを嘆き、一間に入って自殺しようとして母に止められた。母が正行に「父に代わりて軍を起し、君の御爲に盡し奉らしめん爲にはあらずや」[10] と言われた。これ以来、「正行は父の遺言と母の教訓とを守りて、一日も忠義の念を失ふことなく、漸く成人して、後村上天皇に仕へ奉り、屢々、戰功を立てたり」[11] と記述した。楠木正行が後村上天皇に忠誠を尽くすために、四条畷の戦いで弟と刺し合って死んだことも詳細に述べられ、「忠臣は孝子の門から出る」という格言も添えている。

---

(8)　同上，p8。
(9)　文部省．『尋常小學修身書　兒童用　巻6』．國定教科書共同販賣所，1913年，p14。
(10) 同上，p15。
(11) 同上。

そして、高等小学修身教科書の巻一の「第三課　忠君愛國」で、「我等の祖先は世世忠君愛國の大義を発揮せり。我等も亦祖先の美風を繼承し且之を子孫に傳へざるべからず」(12)と表現した。加えて、「一朝國難の起る場合には、身を棄て家を忘れ、力を盡して之に當り、以て天皇陛下大御心を安んじ奉るは忠君愛國の道にして、かの楠木正成正行、河野通有の事蹟の如きは、千古の模範なり。近時においても、廣瀬武夫の如き、谷村計介の如き景仰すべきもの少なからず。又戦場に赴かなざる者がよく其の職業に奮勵し、恤兵事業、軍人家族の救護等に力を盡すも、等しく忠君愛國の道なり」(13)という内容もあった。

そのほか、第二期国定修身教科書において、「忠義」及び「忠君愛国」といった教材を多く取り上げ、正成・正行親子の事柄が「忠君愛国」の「千古典範」と呼ばれ、広瀬武夫、谷村計介などの近代軍人も教科書に押し付けようになった。その中で、楠木正行による「孝行」の実践者としての事柄は豊富になっている。これは表面的に見れば、楠木正行が当時の小学生に近い年齢であり、模倣されやすかったからである。さらに突き詰めて考えてみると、この頃の「忠君愛国」教育の含意は、「忠義」から「忠孝」へ変化しつつあり、「忠君」が第一の「孝行」となっている。

（二）第三期：「忠孝一致」（1918年-1934年）

1917年、日本では臨時教育会議と呼ばれる内閣直属の教育諮問機関が設立された。臨時教育会議は当時の情勢を踏まえ、学制改革に向けた一連の答申を行った。世界に渡って平和主義運動と民主主義運動が勃興したにつれて、大正の教育界にも大きな効用を及ぼした。そして、大正時代の日本の教育は、明治時代からの国家主義的な思想と、第一次世界大戦後の大正デモクラシーの思想との二つの流れの影響を受けていた。また、修身では臨時教育会議の答申で国民道徳の高揚が強調されたのを受け、封建思想よりは国際協調の性格が強められると頑固に主張したものの、国家主義的、家族主義的な内容は引きつがれた。

第三期国定尋常小学校修身教科書では、「忠義」を題目として楠木正成・正行親子の話を書いてはいたものの、前の一期と二期に異なったところがあった。それ

(12) 文部省.『高等小學修身書　児童用　巻一』. 東京書籍, 1913年, p6。
(13) 同上, p6-7。

は、天皇が正成の「忠義」を讃える時に、正成は「強敵を破ることが出来ましたのは全く陛下の御徳のによること」(14)と答えた。後で、「挙国一致」の課文では、「明治三十七八年戦役は、我が大日本帝國が國家の安全と東洋の平和のためにロシャと戦って、國威を世界にかぐやかした大戦争であります。明治三十七年二月十日に宜戦の詔が下ると、國民は皆一すぢに大御心を奉して、國の爲に盡さうとかたく決心しました」(15)と書かれている。

そして、『高等小學修身書　巻二』の「第二十五課　忠孝一致」が「楠木正行が父の教訓を守り、其の志を継いで天皇の御為に盡したことは、我等の鑑とするところである。忠は實に我等の祖先が第一の本務として恪守したところである」(16)と書かれている。その後、「君臣は親子のような関係であって、天皇は臣民を子のようにおいつくしみになり、臣民は子が親に対するように天皇を敬慕し奉っている。そこで、忠と孝とは同じ心情であって、忠孝はこ々に相一致するのである」(17)と記述した。最後に、「忠孝の一致は、實に我が優絶な國體に本づいて生まれて来た美風である」(18)と強調した。

第三期国定修身教科書では、「補翼皇祖」、「君民一体」、「忠孝一致」、「翼賛天皇」などを国民道徳として繰り返し登場している。その中で、日本の道徳では、天皇に忠を尽くせば孝の自ずからその中にあるというべきであると述べている。君臣は親子のような関係であり、臣民は子が親に対するように天皇を奉っているという意味が含まれており、「忠孝一致」が日本の「国体」の象徴であると伝えられている。そうすれば、天皇に忠誠を尽くすことと祖先に孝行を行うことを結びつけ、そして「忠」を優位な地位にし、孝を「忠」の自然な結果とし、さらに両者の一致を社会の第一の要義として国体に上昇させることで、偏狭な民族主義、国粋主義に踏み出しやすくなった。

（三）第四期と第五期：「臣民誠忠」から「忠誠義烈」へ（1935年-1945年）

1931年の九一八事変の勃発を契機として、日本の教育は軍部の影響を大きく受けるようになった。大正期半ばから昭和初期にかけて天皇機関説は日本で国家

(14) 文部省．『尋常小學修身書　兒童用　巻5』．日本書籍，1930年，p8-9。
(15) 同上，p9。
(16) 文部省．『高等小學修身書　児童用　巻二』．文部省，1930年，p155。
(17) 同上，p156。
(18) 同上，p157。

公認の憲法学説であったが、軍部の台頭による機関説排撃が始まった。その結果、日本政府が1935年８月３日に第一次国体明徴声明を発し、天皇機関説は国体の本義に反するとした。その後、軍部勢力は国体明徴を徹底するために、政府に迫って第二次国体明徴声明を公布させられた。その内容が、第一次国体明徴声明の上で「天皇機関説は、神聖なる我が国体に悖り、その本義を愆るの甚しきものにして厳に之を芟除せざるべからず。政教其他百般の事項総て万邦無比なる我が国体の本義を基とし、その真髄を顕揚するを要す。」(19) と声明した。

天皇機関説事件に端を発した国体明徴運動が、憲法上の学説問題に止まらずに教育、政治、思想界、宗教界にまで及んでいる。1935年４月10日に日本文部省訓令第四号を発し、「刻下ノ急務ハ建国ノ大義二基キ日本精神ヲ作興シ国民的教養ノ完成ヲ期シ由テ以テ国本ヲ不抜二培フニ在リ我ガ尊厳ナル国体ノ本義ヲ明徴ニシウニ基キテ教育ノ刷新ト振作トヲ図り以テ民心／嚮フ所ヲ明カニスル」(20) と定めた。以上から見ると、「天皇機関説」事件と「国体明徴」運動を表徴として、日本の右翼団体の国粋主義思想が氾濫した。

軍部ファシズムの干渉の下、教学刷新評議会の設置と答申・建議をもとにして推進された教学刷新のもと、全ての教育機関が「刷新」の対象となり、天皇神格化という路線で様々な教育の再編が志向された(21)。教育刷新評議会の関連提案に基づき、近代日本は「皇国精神」と「臣民の道」を中心とした教育方針を実施し、「皇国」観念の下で極端化した教育体制の構築を窺わせている。さらに、1937年の盧溝橋事件によって日本侵華戦争が始まり、日本は教育を戦争への国家総動員体制の渦中へと巻き込んでいくようになった。

それで、第四期国定修身教科書を出版して採用された。第三期の内容と比べると、『尋常小學修身書　兒童用　巻６』の「第三　忠」で「天皇は正成を召させられて、親しく其の忠義をおほめになりました。正成は、『強敵を破ることが出来ましたのも、ひとへに陛下の御稜威によるのでございます。』と答へ申し上げまし

(19)「国体明徴ニ関スル再声明ヲ通牒ス」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A01200686500、公文類聚・第五十九編・昭和十年・第二巻・政綱二・地方自治二（台湾・統計調査）・雑載（国立公文書館）

(20)「国体明徴に関する文部省訓令（昭和一〇．四．一〇）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A15060085400、国体明徴に関する件（国立公文書館）

(21) 小野雅章．「国体明徴運動と教育政策」．教育學雑誌，33巻，1999年，p45。

た。」[22]と書かれている。第三期の「御徳」から「御稜威」という用語へ変わっている。「御稜威」という用語の使い方がこの時期における天皇の神格化を表している。「第四　孝」の内容に新たに正成が正行に「天皇から賜はつた菊水の短刀を授けて、河内へ歸らせました。」[23]と記載している。

第四期国定修身教科書『高等小學修身書　第三学年用』の「第十二課　忠孝」において、「天皇は我等大家族の家長であらせられるかやうな家國の制に基づいで、我等國民は、子が父母に對する敬愛の情を以て萬世一系の皇位を崇敬する。そこで忠孝は一であって二ではない」[24]と述べられている。そして、「家の團結は家長によって統一せられ、國の團結は皇位によって統一せられるさうして忠孝は此の統一を確實にし、其の團結を鞏固にするものであるそれ故、人々が忠孝の大義を辨へてよく之を守つたならば、家國の繁榮は期して待つべきである。」[25]と書き、「萬世一系の天皇」が「国民の家長」として宣伝された。

第四期の教科書における楠木正成・正行という人物が依然として登場され、「忠義をもって君に仕えることを第一の孝行とする」という楠木正成の遺言や、自殺しようとする楠木正行が母に制止されることとか、敗戦した後で弟と刺し違えてしまった結果という大筋が変わらずに述べている。しかし、詳しい内容あるいは用語の違いから、天皇への「孝」が強調され、「国家」が「家族」に凌駕するという概念の転換が体現されている。この時期における「忠君愛国」教育は、天皇が国家と家族の二重構造の頂点にいて、全ての国民が天皇の「臣民」であり、天皇に忠誠を尽くすことを強調している。

1941年に日本が小学校を国民学校と改称する「国民学校令」を公布し、「皇国ノ道」に則って国民の「錬成」を目的とした。同年12月に、日本海軍が真珠湾にあるアメリカ太平洋艦隊を攻撃したことにより、太平洋戦争が勃発した。戦時体制への即応を強化したために学校は戦意を昂揚し、戦争遂行に向かって国民の心身一体修練の場となっていた。それに応じて、第五期の国定教科書は「皇国臣民としての道徳」を意識した性格を極端に進めて、学生を「天皇の兵士」あるいは「皇軍将兵」として培養している。

---

(22) 文部省.『尋常小學修身書　兒童用　巻6』. 共同印刷株式会社, 1939年, p14。
(23) 同上, p16。
(24) 文部省.『高等小學修身書　第三学年用』. 共同印刷株式会社, 1940年, p40。
(25) 同上, p40-41。

第五期国定修身教科書『高等科修身一　男子用』の「十三　勇気」に「大東亞戦争下、いかに多くの忠勇義烈な皇軍将兵が、義勇公に奉ずる眞勇をあらはして、國體の精華を發揮したかを思ひ合はせるべきである。しかも私どもは、それに續くべき大任を持つてゐる。」(26) と言われている。その結びに「大東亞戰爭下、私どもは怠ることなく、堅忍持久の清神、不撓不屈の氣魄を養ひ、眞の勇者となつて、皇國のために七生報國を誓はなければならない。」(27) と書いて楠木一族に関する「七生報國」という表現を用いられる。

そして、『高等科修身二　男子用』の「一　國體的尊嚴」で、「尊いこの國體のもと、皇國の民は、現御神の恢弘あらせ給ふ大御業を輔け奉って、皇室のきはみない御栄えのために一身を捧げまつることを、その本分としてゐる。わが國古来の美風は、君臣の分を固く守り、分に従って盡忠報國の誠を致すところにあるのであり」(28) と「和氣清麻呂、楠木正成、北畠親房諸公の忠誠義烈が千古の龜鑑として輝き、このような美風を承け繼いで、ますますわが國體の尊嚴さを發揮せしめ得るよう努めなければならない」(29) という内容が示されている。

第五期国定修身教科書の内容には「臣民誠忠」と「忠誠義烈」を強調し、天皇を「現御神」と表現された。内容から見れば、表面的には忠君愛国の一致性を強調しているが、実は当時の日本軍国主義の支配者が自身の利益を守るために楠木正成と正行のイメージを利用して天皇と国家に無条件に忠誠を尽くすことを国民に洗脳していた。この時期において「忠君愛国」教育は国民を盲目的に天皇の権威に服従する「忠良臣民」に教化することを要求している。太平洋戦争の思想統制と兵力動員を行ったために、軍国主義勢力が対外侵略戦争の参加と支援を「忠君愛国」の体現として民衆に思わせ、取り返しのつかない戦争の悲劇をもたらした。

三、近代日本「忠君愛国」教育の変遷

（一）伝統的な徳目

「忠君愛国」教育の出発は前近代と近代の繋がりによって生まれてきた。水戸

(26) 文部省.『高等科修身一　男子用』. 日本書籍, 1944年, p91。
(27) 同上, p97。
(28) 文部省.『高等科修身二　男子用』. 日本書籍, 1944年, p5。
(29) 同上, p6

学では南朝正統論と結びつけて称揚し、崇拝したため、尊皇討幕の機運が高まるにつれ、正成の「忠誠」は勤皇の志士たちの行動理念として大きく作用するようになったが、こうした考えは討幕によって打ち建てられた明治新政府にも受け継がれた。『教育勅語』の発布が進められるに伴い、教育の基本方針が「忠君愛国」という国民が守るべき道徳を重視するような内容へと変化した。過去に、「忠君」が武士階級の倫理、道徳規範として伝統的な徳目であり、近代の国家によって採用され、特にナショナリズムの影響のもとで皇祖皇宗の継承者である天皇への「忠君」に解釈するようになった。

（二）忠君思想の極端化

第一期国定教科書は国家により教育内容を定めた。また、教科書に忠実に従って教えることが教師の使命であり、それによって、国定教科書は絶対的な権威を持ち、その中に非真理、非真実な内容があっても学校教育を通じて日本の国民常識となった。唐沢富太郎が著した『教科書の歴史：教科書と日本人の形成』[30]では、第一期国定教科書が近代的倫理の修身教科書と位置付けている。しかし、教科書で「忠君」が国家道徳として「天皇」への忠心という国家倫理も強調したのである。前述した教科書の内容を参照すると、学校教育が「忠君愛国」の思想を育てることを重視していることがわかる。

天皇制中心主義が推進されるにつれて、第一期国定教科書に関する意見が相次いで現れている。1905年に日本は日俄戦争（日本では日露戦争と呼んでいる）で勝利し、世界列強の仲間入りをした。帝国主義段階に入っていた日本が、日俄戦争に勝利を獲得したものの、国内経済は恐慌状態に陥っていた。その為、日本政府は対外侵略を狙い、国内的には「忠君愛国」の概念を生徒に植え付けることに続けて力を注ぎ、国家主義の思想を教育によって生徒に教授した。

国際連盟脱退などの国際情勢を背景に、日本の軍部が台頭した。近代市民社会の道徳つまり個人的な道徳と社会的な道徳が協調され、国家に対する道徳が相対的に低く見られていたため、忠孝主義の徳目に偏っていないとの非難と、日本弘道会からは忠孝を軽視し皇室に対する徳性の涵養には不適切との非難が出てきた。それで、軍国主義の圧力により、1910年に出版された第二期の国定修身教

(30) 唐沢富太郎.『教科書の歴史:教科書と日本人の形成』. 創文社, 1956年。

科書では、天皇や国体に関する内容が大幅に増え、国旗や靖国神社に関する内容が本文から標題へと移った。

第二期国定教科書の発行にあたる時期は、日本が対外膨張のために、重工業が急速な発展を遂げた時期でもある。それで、第二期国定教科書で見出しが「忠義」から「忠孝」へ移り、以前の「忠君」が「忠君愛国」に変わった。すなわち、天皇に対する「忠」と親への「孝」同じような地位を上げるようになった。その後、大正デモクラシーと児童中心主義の新教育運動の影響を受けたにもかかわらず、国定教科書が国家家族主義の倫理観を基調にして改訂を進めている。

それで、第三期国定教科書では「忠孝一致」が掲載された。「国民道徳」のスローガンを借り、義務教育における「国家道徳」と「日本精神」の育成を強化したと同時に、国家神道などの手段を利用して、学校教育における宗教観念の育成を強化した。第四期と第五期のテキストを分析した上で、この時期の道徳教育では、天皇と日本の国体を神格化するのみならず、民族的優越性を示しつつナショナリズム思想を宣伝し、国民思想を統制することによって、国民に天皇への忠誠を呼びかけていたことがわかっている。その中で、一命を捨てて天皇に仕えるという献身精神を煽動した。

総じて言えば、1930年代に入ると、「忠君愛国」教育の内包では、君臣の関係は義で結合しただけでなく、親と子の情で繋がっている。したがって、「忠君愛国」教育はこの時期から、民族主義と国粋主義の影響により、青少年に「忠君愛国」という思想を植えつけ、さらに「忠孝一致」の概念を「国体の本義」として強調された。つまり、全ての国民が天皇に忠誠を尽くすことを求められるだけでなく、天皇への忠誠が親孝行への道であったことも含めている。その内容の解読から、この時期の国民道徳教育では、天皇と日本国体を言い張ることで、民族優越思想を宣伝し、国民に天皇への忠誠を呼びかけている。

（三）ナショナリズムの拡大

太平洋戦争勃発後、近代日本は教学刷新評議会の答申に基づいて、小学校を国民学校に改称し、「肇国精神」と「八紘一宇」の教育方針を実施することによって、「挙国一致」という標語の下で国家総力戦体制を構築し、「東亜新秩序建設」という欺瞞的な主張で国民を煽動し、その過程で天皇のために玉砕し、忠誠を尽くす青年兵士を育成した。それによって、近代日本の「忠君愛国」教育が戦争と軍部の

影響で絶えず深化し、国定教科書が最後に軍国主義に奉仕する道具となったことが明らかになった。

それと同じように、天皇制教育の面では、天皇を神格化して絶対化し、天皇に関する神話物語を大きく宣伝し、一般的な大衆に深い影響を与え、神のように天皇に対して崇拝の極みを深く信じさせる。また、武士道精神教育の面では、日本の軍国主義勢力は「忠君愛国」の宣伝に尽力し、天皇と国家のために献身した最終的な行為が死であり、それは精神修養の最高の表現だけでなく美学である。このような欺瞞の下で、日本民衆は是非を問わず、天皇と軍隊によって推進された戦争と軍事行動であれば簡単にいつでも死ぬことができ、そのため多くの日本軍の将兵が勇敢に軍国主義のために命を捧げた[31]という研究も近代日本の「忠君愛国」教育の結局は軍国主義の教育であることを説明している。

近代日本国定修身教科書は国民道徳思想を統制する道具として、「忠君愛国」教育の特徴と意味を体現している。代表人物である楠木正成・正行を通して、「忠君愛国」教育に内包された道徳が「忠義」から「忠孝一体」へ、そして「忠孝一致」から「忠誠義烈」へ変わり、軍国主義・ファシズムという思想が次第に教科書を支配するようになったことが推察できる。最後に、第五期国定教科書が国家のために犠牲するという国民精神を培養したために、「忠勇義烈」の事跡と「国体の尊厳を守る」というスローガンを宣伝し、日本の対外侵略戦争において鼓吹する役割を果たした。

おわりに

近代日本国定修身教科書の「忠君愛国」の徳目を見ると、第一期の「忠義」から「忠孝」へ、「忠孝一致」から「忠誠義烈」へと、国定教科書の「忠君愛国」の解釈が強化されている。このことは、忠を尽くすために命を投げ出すまでの凄惨な破滅的行為を内包している。最初の教科書では、忠義の「忠」は君主に忠義を尽くし、「孝」は父母に孝行を尽くすという意味であったが、第三期の国定教科書では「忠」と「孝」が一つになり、天皇は皇祖であり君主であり、天皇に対する国民の「忠孝」が一つになった。第四期と第五期が「忠孝一致」を基盤にした上で、玉砕

(31) 张义素.「日本军国主义教育及对国民意识的影响」. 日本学刊, 2005 (04), p83-95。

の形で天皇に忠誠を尽くすよう国民を教化した。

参考文献

山田美妙編.『日本大辞書　附録』. 日本大辞書発行所, 1893年。
普及舍編輯所編.『新編修身教典　尋常小學校用　卷4』. 普及舍, 1902年。
中村格.「天皇制教育と太平記：正成・正行像の軌跡」. 日本文学, 45（3）, 1996年。
井上哲次郎.『勅語衍義　巻上』. 文盛堂, 1899年。
文部省.『尋常小學修身書　第4學年　児童用』. 印刷局, 1903年。
文部省.『尋常小學修身書　兒童用　巻6』. 國定教科書共同販賣所, 1913年。
文部省.『高等小學修身書　児童用　巻一』. 東京書籍, 1913年。
文部省.『尋常小學修身書　兒童用　巻5』. 日本書籍, 1930年。
文部省.『高等小學修身書　児童用　巻二』. 文部省, 1930年。
小野雅章.「国体明徴運動と教育政策」. 教育學雑誌, 33巻, 1999年。
文部省.『尋常小學修身書　兒童用　巻6』. 共同印刷株式会社, 1939年。
文部省.『高等小學修身書　第三学年用』. 共同印刷株式会社, 1940年。
文部省.『高等科修身一　男子用』. 日本書籍, 1944年。
文部省.『高等科修身二　男子用』. 日本書籍, 1944年。
唐沢富太郎.『教科書の歴史:教科書と日本人の形成』. 創文社, 1956年。
张义素.「日本军国主义教育及对国民意识的影响」. 日本学刊, 2005（04）, p83-95。